

FRN 79-2 -10 — 7-10

資料名 増益家臣傳

刊・写

軸・帖

4 冊

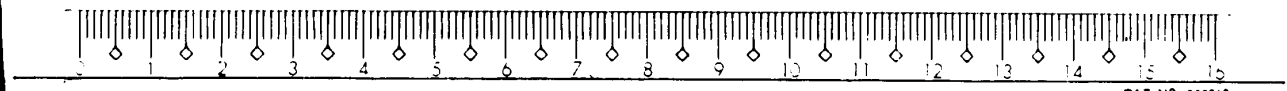
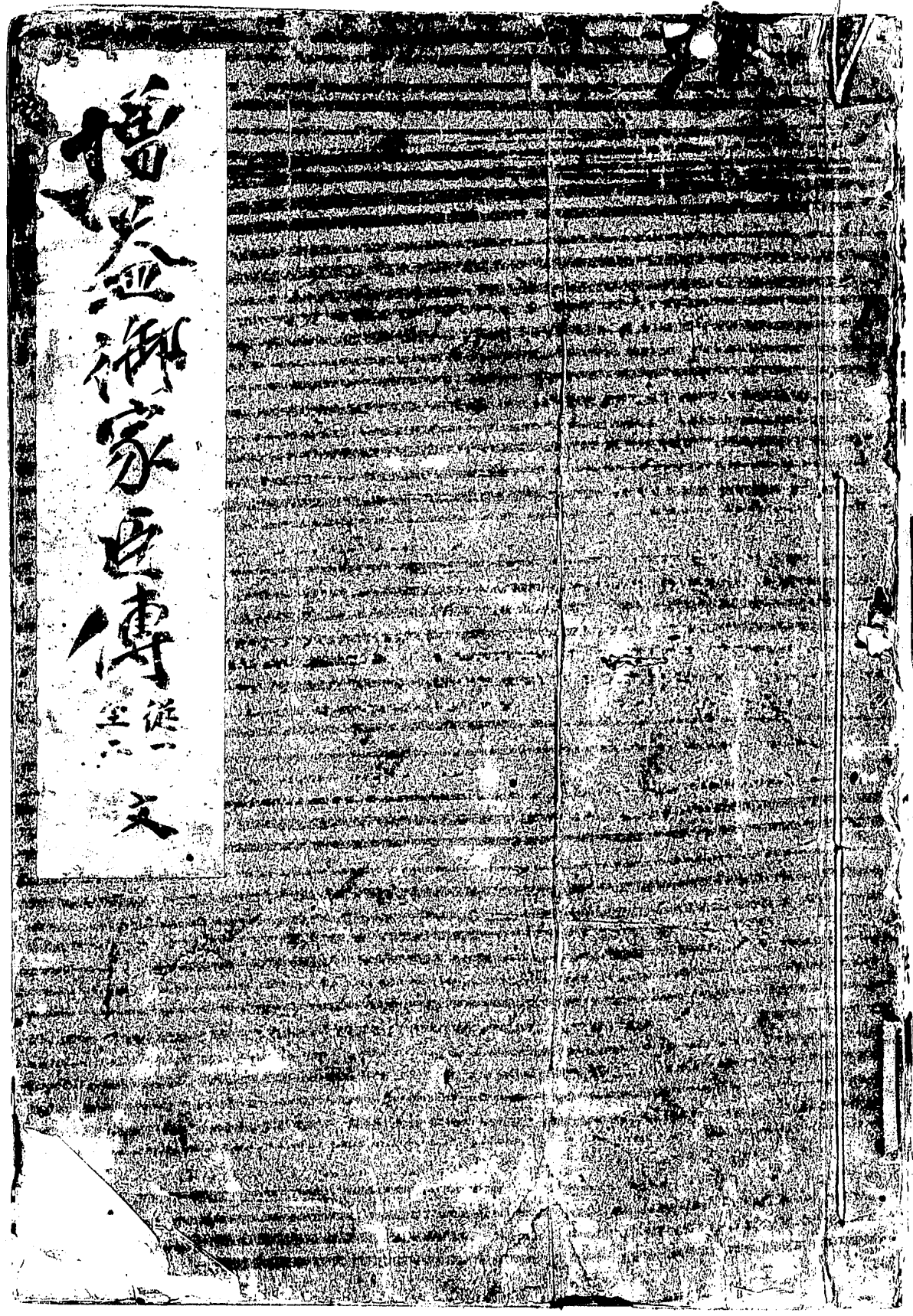
所蔵者 九州大学附属図書館

函名 680 - 2

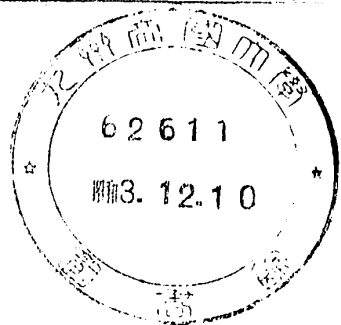
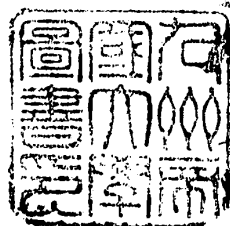
撮影 富士ゼロックス(株)

昭和54年3月7日

福岡市民図書館



680
ノ
2



傳記文學

卷之一

井上圓房之房傳
毛利但馬友信傳
栗山備後利安傳
黑田如元一成傳
久野西庵重勝傳
淺見又左衛門基次傳

卷之二

里付合意坊法勝傳
黑田常高門統種傳
菅和泉正利傳
村田出羽重次傳
里口佐助一成傳
吉田玄波長利傳

卷之三

三宅春後家義傳
竹家石見次貞傳

林梓龍直利傳
原江島種家傳
曾我龍又左衛門傳
生田本庄和重勝傳
船岡忠久男傳
色屋武藏武久傳
市島松春傳
秦相島傳
馬杓春庵一正傳

卷之七

版田
昭石
尾上

傳記
畧記
畧傳

杉山
立水

傳

小河

傳

水友

傳

那家
傳記

林傳

記

四家

傳記

卷之八

月成

畧傳

周本

傳大略

濱田

畧記

竹田

畧傳

南郊

畧傳

寺田

大畧

亮力付

走田 卷之九 孫田 山田 松平 家田 頭山 玉田

畧傳 家傳記 史傳 閑傳 傳畧 畧傳 傳

大野 高橋 本附 岡田 伊丹 毛利 伊原 松平

傳記 傳記 傳畧 傳畧 傳記 傳記 傳記

わが家の子をすくふ孫枝系は書換うけ
外三家の健士成事うきうきやうき
石目小階席へ横無家信傳あやうきうき
おのれはこれいふ山記の坊主なりやうき
新ふ羽子計の傳記へこれいふ人の親戚は
更なれは清なりやうき遠へきなり
きなりいふやうきと頼ふのうき

横無家信傳

き之を月録

- 井上周防之房傳
- 毛利但馬五信傳
- 軍山備後利安傳
- 忠田重代一成傳
- 久野四重清重傳
- 後及金清老成傳

望

増善家伝巻之二

井上圓防二房傳

井上圓防二房は、知名、信玄、市後、九郎、高、政、并、不、
金、乃、段、圓、防、と、号、し、隠、居、し、剃、髪、し、く、以、而、
福、と、號、源、流、と、号、し、將、軍、頼、信、二、男、頼、政、と、井、上、
三、郎、と、く、是、井、上、の、左、祖、と、云、ふ、之、房、と、父、と、井、上、
三、郎、と、信、之、と、云、は、名、傳、家、其、子、と、井、上、平、左、衛、門、
之、と、云、は、號、と、剃、髪、し、く、信、之、と、号、と、云、は、井、上、
三、郎、乃、人、之、傳、也、と、云、ふ、子、と、号、と、云、は、子、則、之、房、と、云、ふ、

室保郷後とくまゝ安部内務省に
於て平々安安として事行男女の事なし
二男はあいつ井上虎と物と云頼む遠流
帰て十々ある事ありて事世に多く
その二男は二男井上たは世に白人
初めはとくまゝ尾上重女
別家流に依りて利
隠居の時もあるが
ともある婦人井上源九郎と云
の事と忠之はたふす初めの月長流九郎たつた使者

二一と能く下りてあるが
上つて退きし其時海に雲あり
町へて見えて門の彼方よりあるが
船とあると云同は井上と云
月は隠居の時もありてあるが
かゝる事つねにありてあるが
船と云同は井上と云
忠之と云と云と云と云と云
及自叙の時あるが

奇母の如く深慮の麟翁伯に遊覧に遊

武家物語

松田友信妻女と義統の妻後女との事

友信の男女子と婦子等々
其の長三子松田平の
上平太夫と云ふ事ありて其の長三子松田平の
松田平の長三子松田平の
仲より其の長三子松田平の
と云ふ事ありて其の長三子松田平の
宗和の子の如く云ふ事ありて其の長三子松田平の
宗和の子の如く云ふ事ありて其の長三子松田平の
宗和の子の如く云ふ事ありて其の長三子松田平の

友信の男女子と婦子等々
其の長三子松田平の
上平太夫と云ふ事ありて其の長三子松田平の
松田平の長三子松田平の
仲より其の長三子松田平の
と云ふ事ありて其の長三子松田平の
宗和の子の如く云ふ事ありて其の長三子松田平の
宗和の子の如く云ふ事ありて其の長三子松田平の
宗和の子の如く云ふ事ありて其の長三子松田平の

意——て数——日——い——ま——あ——が——但——は——士——の
下——周——に——は——て——ま——あ——が——不——好——見——望——に——輕——く——短——き
う——よ——が——に——い——ま——あ——が——ま——あ——が——の——功——成——新——く
り——あ——が——に——い——ま——あ——が——ま——あ——が——に——い——ま——あ——が——
の——事——有——方——を——り——て——い——ま——あ——が——の——不——思——の——事——多——く
い——ま——あ——が——の——士——は——道——を——ま——あ——が——製——す——る——者——に——唯——人——の——え——ん——け
師——け——と——い——ま——あ——が——の——事——は——な——い——と——い——ま——あ——が——
は——い——ま——あ——が——の——事——は——な——い——と——い——ま——あ——が——
い——ま——あ——が——の——事——は——な——い——と——い——ま——あ——が——
に——は——或——時——た——う——に——い——ま——あ——が——の——事——は——な——い——と——い——ま——あ——が——
向——は——南——へ——の——方——に——い——ま——あ——が——の——事——は——な——い——と——い——ま——あ——が——
も——は——い——ま——あ——が——の——事——は——な——い——と——い——ま——あ——が——
い——ま——あ——が——の——事——は——な——い——と——い——ま——あ——が——
表——は——い——ま——あ——が——の——事——は——な——い——と——い——ま——あ——が——
身——は——い——ま——あ——が——の——事——は——な——い——と——い——ま——あ——が——
け——は——い——ま——あ——が——の——事——は——な——い——と——い——ま——あ——が——
へ——は——い——ま——あ——が——の——事——は——な——い——と——い——ま——あ——が——
あ——が——い——ま——あ——が——の——事——は——な——い——と——い——ま——あ——が——

天月多物は花 一和事記流は好 目通年樂
に 一と身は後をけ 一と身は後をけ 一と身は後をけ

黒田之代一成人道 旺陽 備後女 加藤之代 一と

二男之代が藤原家 又用道 一と身は後をけ 一と身は後をけ

一威之代一と女之代 一と身は後をけ 一と身は後をけ

一威之代一と女之代 一と身は後をけ 一と身は後をけ

一威之代一と女之代 一と身は後をけ 一と身は後をけ

一威之代一と女之代 一と身は後をけ 一と身は後をけ

一威之代一と女之代 一と身は後をけ 一と身は後をけ

一威之代一と女之代 一と身は後をけ 一と身は後をけ

一威之代一と女之代 一と身は後をけ 一と身は後をけ

一威之代一と女之代 一と身は後をけ 一と身は後をけ

一威之代一と女之代 一と身は後をけ 一と身は後をけ

一威之代一と女之代 一と身は後をけ 一と身は後をけ

一威之代一と女之代 一と身は後をけ 一と身は後をけ

一威之代一と女之代 一と身は後をけ 一と身は後をけ

一威之代一と女之代 一と身は後をけ 一と身は後をけ

一威之代一と女之代 一と身は後をけ 一と身は後をけ

病死に事無き外記事時不通下直原所へ婦人
久留山寺にありて婦人一人に家傳にありてあり
中老組にてありて婦人一人ありてありてあり
三男ありてありてありてありてありてあり
平去り時にありてありてありてありてあり
次女ありてありてありてありてありてあり
次女ありてありてありてありてありてあり
三男ありてありてありてありてありてあり

七人ありてありてありてありてありてあり
久留山寺にありてありてありてありてあり
中老組にてありてありてありてありてあり
三男ありてありてありてありてありてあり
平去り時にありてありてありてありてあり
次女ありてありてありてありてありてあり
次女ありてありてありてありてありてあり
三男ありてありてありてありてありてあり

新青之漢又其指の婦子九門に如水に随ひ
豊及陣に行粉青と云り一筋をねて
随ひ一山棠にたれた其門に云々あるが如く
如水の感状と歸るも同年長政所を國
と拜領一入國の後きき字石歸り小隈の
城に居るが如くと預るも一平後又其指の環乃
城に居るが如く他家より書状と云々
他國に云々且つ歸るが如く長政軍位とい
はねば其のより入るが如く由新紙と書せば

い一平後又豊と云や一通に云々長政と云
い一平の漢も一事と速成に云々思ひえ
慶長十年屋前と云々其代田三平其門
輝政のえの悲意成に其彼方へ行くが如く
ア一平又其年い川に云々其後其代田
輝政又其指と扶持一平とい一平長政と
い其指其善財其殿兵庫頭其指と云又
其指其扶持其政一平とい其指其善
い其指其扶持に同心其指其長政輝政中要なる

咸亨に帝同とふかりきり慶長十六年
家康公上洛の時又村就善卿は輝政
又其弟政重の事を告げたまはるる文
令れきりせし後、帝播磨にありける由長
政重といふを、ね平武藏守殿と頼や入とい
ふれ、後に播州と追放せられ、慶長十九
年の冬、秀頼公諒人にと抱え、一時大坂
乃城に遷し、元和元年、秀頼公還心の時、諒
西に、と預け、五月六日の合戦に伊

達陸奥公、正宗の命、放つ積砲にあふり、
手て戦ひ多しといふ、母心術正が、戦ひに
唯は易き事なるを、心抵はにくき場に、
と、則ち、人に難と、難事なり、故に
千勇名といふや、いふ、母君、余は、首に、
敵に、何と、戦ひ、持、ず、是、人の、戒、や、余
事、に、と、侍、る、是、は、正、なる、名、
元、に、い、たり、
村、就、善、公、諒、人、に、は、る、又、其、弟、
村、就、重、公、政、重、の、事、と、名、を、い、ふ、古、く、播
州、に、と、預、け、豊、子、國、今、井、や、い、う、所、に、ある、と

増益家伝傳卷之二

野村太政大臣祐祐傳

野村太政大臣祐祐、母里及改但馬守に幸
本姓、曾我之所村、播州の村乃名之賢吉是
氏、子、氏、子、太政大臣祐祐、初より里田に幸
仕へ播州諸所の小迫合にも度々、病方天正
三年の春紀州根來叛の法師、兵と起
大邊、少少と起、秀吉、其、押とし、和泉
岸和田乃、成に中村武部、女補と遣、了れ

又黒田吉良長政蜂頭関六家政赤松
下野守の君を迫り雅樂頭黒田兵庫頭と
源番ととて並置然るに二月廿四日根来難攻
乃凶徒邪降するに命をまかりしにねに
と懷素へ傳ふ大勢守和田一残り素長
政勇に進んで政戦ひ真先に寄りせしむ教
之月分に加はせし外米々切所一教多
討たむよ教も返教もこれ味方の知れり
えきる安に相違ふの意を討負て引退しな

はたしく思ひきり少程何と味方の味と慕
んてとて勢士右討りまゝとこれ味方乃兵ハ
既に引えきれ見防く趣き難くもむかき
西に太極無防唯き人誂に残り當り一教の
再び返りまゝとて格の育き上は
上りきれ行多く残り當りたるや思ひきり
又引退きり内に討ち一騎臨に残りこれ
と太郎無防迫りしにこれとて戦ひ
きり格負せしり一教人オに休居たり

勢方より又戦ひきつは度しよに戦ふ事
同前負ふ事より止む事なれば近所を
太政大臣は是とていふに依り太政大臣は
教めはる居たりは但しとて言ふ事
長政はにけしとていふ太政大臣は
残り留りて大勢の教とて返さる事
天正四年に依りて従ひて是に下り
七月七日豊前国筑城郡宇留津の城と
る事吉川少平川の勢方とて是とて政
終に落

城にけし太政大臣は是とていふ事
同十五年卯月十日長政は薩摩の軍
勢より豊前国宇留津に戦ひて太政大臣
我但の足輕廿人斗し是より一教と
川端の少平の勢方とて是とて政
終に落
同十五年の春中津川の城に中津の勢
方より豊前国宇留津に戦ひて太政大臣
我但の足輕廿人斗し是より一教と
川端の少平の勢方とて是とて政
終に落

何良家傳

卷之二目錄

野村方郎多活法勝傳

中園玄匠在道統種傳 黒田好彌

菅 和泉正利傳

村田出明立次傳

野口左馬一成傳

吉田重政重利傳

足田前親の統種傳

足田前親の統種と平姓中河の初名は前親なり其
父は山城守少少の法王思下なる無量寺の圓下
毛郭山圓乃師の領一戸乃城を著高豊
おる城なり一國なり一始暫く法王に侍
者なり内意ありてまゝ改まらぬとて城井
い川中河井なる豊なり中にて鼎の三三の
城を據りて毫くをゆるめ一何れも活敵なり
然るに川右の脂を二師をばたかす戸を著高

百石の場所、統種嫡子たる帝に就任なり。是時
世宗は、もと同音の場所を、もと父より、もと三千、もと
以、もと願は、もと石、もと文、もとと、もと言、もと三、もと男、もと中、もと同、もと七、もと帝、もと四、もと男、もと中、もと</

